

[資料]

マーチャント・バンカー研究(2)

— M. M. Warburg & Co. Hamburg の運命(2) —

きゅう
及 能 正 男

目 次

1. はじめに
2. 『M. M. ウォーバーグ銀行の復活』
3. 参考書目
4. 注 記
5. 同行経営者略歴 (関係分のみ)

以 上

1. はじめに

さきに本論集第27巻第4号(1993年3月、「マーチャント・バンカー研究(1)—— M. M. Warburg & Co. Hamburg の運命(1)——)において概括した、ハンブルク所在のマーチャント・バンク M. M. Warburg & Co については、本学より1998年9月より99年3月までの在外研究(B)の機会を得て再訪できたので、上記(1)に次ぐ本編(2)を以下掲出する。本稿成立について上記機会を与えて頂いた大学当局および経済学部同僚各位に厚く感謝いたしたい。

なお、本稿初出は学士会会報(2000年1月、通巻第826号)編集局の需めに応じたものであるが、上記拙稿(1)との内容重複等もあるので、一部手直しを行い、ドイツにおけるユダヤ系有力マーチャント・バンクの研究資料(2)として本号に掲出したものである。

前記拙稿資料(1)には同行当代 Partner の Max A. Warburg (1999年2月14日面談)の亡父、Eric Warburg を中心に、また本邦初訳と思われる同行中興

の祖 Max M. Warburg (当代 Max A. の祖父, Eric の父) の『Aus meinen Aufzeichnungen (備忘録)』の第5章日本編を全文訳出しているが、本編研究資料(2)は、Eric とその長子当代 Max との世代交替を中心に述べたものである。

同行は1998年に創立200年を経て、その行史『M. M. Warburg & Co 1798—1998 (後記, 参考書目⑳参照)』を発刊した。また、同書目中の⑲『Ron Chernow “The Warburgs” 1993. 訳書名『ウォーバグ—ユダヤ財閥の興亡(上, 下)』ロン・チャーナウ著, 青木榮一訳, 日本経済新聞社, 1998』は近年訳出をみていて、同家の永年の歴史を詳述したものとして参考になるが、当代の Max によれば、『身内のことを書かれるのは、昔のことといっても、種々ありましてね』といささか当惑気味のコメントもあった。その著者チャーナウ氏はもちろんユダヤ系の著述家(前著『モルガン家』は全米図書賞受賞, 本書(ウォーバグ)もコロンビア大の G. S. エクルズ賞を受賞)であり、約8週間にわたりハンブルクに滞在して同行・同各家との取材を行った由である。なお、訳者の共立女子大学教授青木榮一氏によれば、前訳書「モルガン」と異なり、まことに日本語訳は至難の原著であった由であり、縦横に挿入されるユダヤ系家族の使用する多数の外国語や古語, 雅語・風俗習慣等は訳出に困惑されたとのコメントを頂いているが、それにもかかわらず完成された訳書自体は達意・風格ある近年稀にみる良訳書となっている。

回顧すれば、筆者に Dresdner Bank 研修後、ハンブルクの Brinckmann, Wirtz 銀行を見てきたらどうかと聞いて頂いたのは旧三井銀行社長故柳満珠雄氏である。61年春、全国銀行協会連合会会長行社長としてテヘランでの IMF・世銀総会出席後、欧州へ出張された柳夫妻は旧友のヤナセの梁瀬次郎氏を通じて、ダイムラー・ベンツ社のアジア担当役員として辣腕をふるった Dr. H. von Wuttke 氏とも親しく、同氏が同行にパートナーとして引き抜かれたばかりなので、同氏とも再会したく、また、戦前から三井家と親交のあった Warburg 家(拙稿, 本論集第27巻第4号, ご参照)の銀行にも久しぶりに表敬したいということで、(柳社長の亡父壯太郎氏は元三井銀行常務(実質, 頭取), Max を訪れた三井八郎右衛門氏(銀行社長)の部下)ドイツ各地コルレス銀行訪問と併せ、Hamburg へ出張されたのであった。同行の極東の古い親密銀

行に対する歓迎ぶりにはまことに心温まるもので、随行した筆者（当時書記一級、28才）にも至れり盡せりまでまことに恐縮のかぎりであった。当時の厳しい為替管理下での滞欧期間延長は外貨送金の当局申請の難点があったが、それは直ちに三井銀行故野田支店長、故竹山副支店長の芳配によって解決された。当時、西独銀行数行の東京進出要望に応じて、邦銀増設（当時、西独内支店進出行は東銀・富士2行のみ）の気運は高まり、当時西独トレーニーの名目で邦銀進出環境の「事前調査団」は大蔵省・日銀や筆者も含め14行19名にも及んでいたものであった。64年秋、国際情勢の激変と両国事情とで銀行相互大量進出はあえなく流産したが、上記各行トレーニー間の交流は乏しい外貨割当の下でも本当に『インターバンク』的友情にみちたものであり、70年代初から激増した進出邦銀間の激しい競争と反目とは全く別の次元のものであった。80年代後半の日本のバブルが90年より崩壊し、筆者が在外研究で訪欧した98年末は、あらゆる欧州各国マネーセンターから邦銀各行がほとんど撤退し、往年のジャパン・マネーの猛威いずこにありやの、落魄した邦銀国際部門の惨状は眼を覆うばかりであった。ここまで落ちぶれたのかとの慄は筆者のみではない。Deutsche Bankの古参の日本デスクは、『ああ、日本の当地の一番古い Fuji Bank Düsseldorfの撤退はあと3ヵ月ですよ』と感慨ぶかけであった。しかし、彼の横の小型テレビの画面は正に同行の157億マルクでの米銀バンカース・トラスト買収を告げるプロイアー筆頭役員の意気軒昂たる記者会見の実況中継であった。

なお、本稿にかかわる資料・情報等の一部については、株式会社さくら銀行調査部欧州駐在調査役山下えつ子氏、同行元デュッセルドルフ支店長鈴木邦昭氏、同行前同支店長樹下邦男氏および IFO Institut, München Dr. Hanns Günther Hilpert 氏に御芳配を頂いた。記して感謝いたしたい。

2. 本文

M. M. ウォーバーグ銀行の復活

—— ドイツにおけるユダヤ系銀行の運命 ——

99年2月のハンブルクの内（ビンネン）アルツター湖は煙ったような粉雪の

降る下で冷たく凍っていた。眼をあげれば、湖岸に沿うフェルディナント・シュトラッセ75番地に、その建物は35年前のまま立っていた。ドイツの個人銀行、M. M. WARBURG^(注1)である。ウォーバーグと英語読みなら、S. G. ウォーバーグ・ロンドンの往時の栄光を連想させるであろう。

三井銀行員だった私は過ぐる64年の秋、この銀行に研修生として2カ月滞在した^(注2)。そして23年後の87年冬、当主のエリック氏と再会した。彼は亡父マックスの『備忘録』^(注3)の日本篇の写しを私に渡して、「もう87歳だよ」と微笑しながら杖を離して立ち上り、64年の初対面の時のように私を軽く抱擁して言った。「うちの家系は皆、学者になりたがり、銀行商売がうまかったのは父マックスだけだった。私も年寄りになった。だが、私は全力をあげて、散逸したり、ナチに押収された当行の歴史的古文書のほとんどを集め、ようやく文庫（アルヒーフ）を造って納めたよ」。眼光炯々、鷲のような鋭い、ウォーバーグ家独特の眼つきは変らなかった。その3年後、エリックは90歳で波乱の一生を終え、生誕地に埋葬された。

生れた土地で死ねなかった全欧州のユダヤ人は、45年のドイツ敗戦までに600万人と称されるのだから、彼は二重の意味で幸運だった。ひとつは故郷で妻子にみとられて永眠できたのだし、さらには奪われた自分の銀行に旧名を復活させ、支配権を回復し、長男マックスに実権を譲って逝ったのだからである。

ヨーロッパのユダヤ系マーチャント・バンカー（個人銀行家）は16世紀のころからナチ台頭までドイツに集中していたことはよく知られている^(注4)。ユダヤ人のジモン・フォン・カッセル（カッセル生れのサイモン）がヴェストファーレン地方のヴァーブルヒ村で定住と家職が認められ、姓もWARBURGと変え^(注5)、両替商と質屋を開いたのは1559年（永禄2年、足利・織田時代）である。時は下って、8代目グンプリッヒ・マルクスにハンブルクでの定住が認められたのは1773年で、その息子、モーゼスとゲルソンの2人が同市街地内で銀行業を開業し、M. M. ヴォーブルヒと名乗ったのが1798年、今世紀の98年は創業200年である。

モーゼスの娘で辣腕できこえたサラの次男モリッツは有名な「ハンブルク五人男」をもうけた。長男アビーは英国で学者と書籍蒐集家で著名となり、三男